

魔法の種 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 田中 勤子 所属: 広島市立城山中学校 記録日: 2017年2月5日
キーワード: コミュニケーション 構音の困難さ 学習支援

【対象児の情報】

・学年 中学2年

・障害名

軽度の知的障害 ADHDの疑い 構音の困難さを持つ

・障害と困難の内容

聴覚的な情報の処理、聴覚的な短期記憶に弱さがある。

特定の語音（イ段の音、キ、ギ、シ、ジ、チ）など、間違いやすい音があるが一貫性はない。

年齢相応の明瞭な発音でないため、話すことにとても抵抗がある。

特定の語音が聴覚的に弁別できないため、書字においても誤りが見られる。

「ぎょうざ」が「じょうざ」、「にんぎょう」が「にんじょう」などの誤表記が見られる。

五十音の配列が曖昧である。

日記の文章は2～3文を決まったパターンで書く。

【活動目的】

・当初のねらい

構音に困難さがあり、話すことにコンプレックスを持つ対象生徒に、iPhone・iPadを使って言語活動の楽しさをたくさん経験させ、自信を持たせたいと考えていた。対象生徒は、間違いやすい特定の語音があるが、一貫性はなく、聞き取った音を誤認識してしまっていると考えた。そこで、iPhoneやiPadを使って、誤認識している語音を視覚から認識し直したり、書くことへのハードルを下げたりすることで、「話すこと」「書くこと」への抵抗を軽減し、コミュニケーションの幅を広げることを目的とした。

・実施期間

2016年5月から2017年2月末

・実施者

田中 勤子

・実施者と対象児の関係

クラス担任

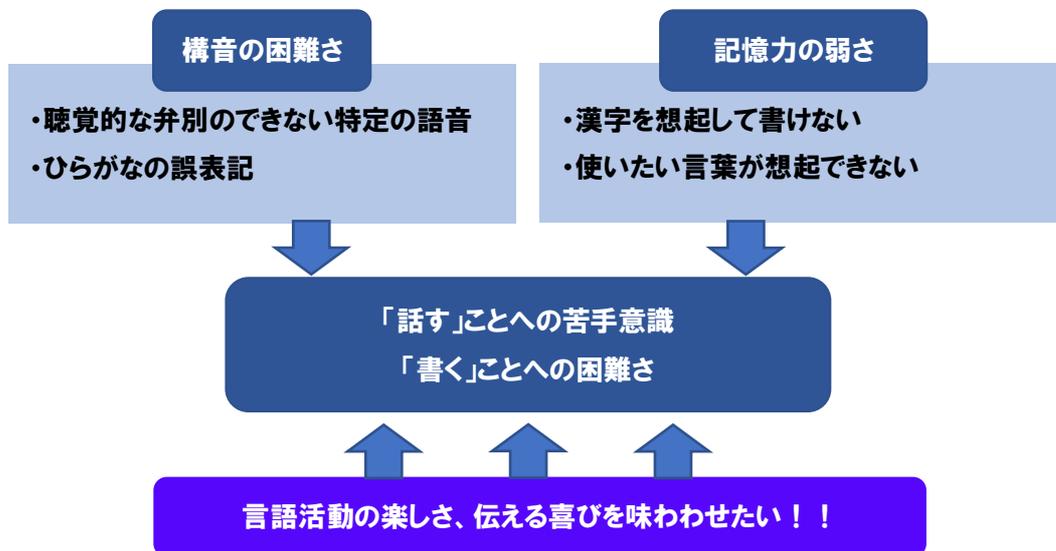
【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

○中1の冬休み明けに他県から本学級に転入。引っ越す前の住居が過疎地で、他者との交流が限られていたことや、兄弟が皆同じような発音の不明瞭さを持っていることから、日常の会話の中で不明瞭な発音のまま構音の獲得期を過ぎてしまい、特定の語音を誤認識してしまったまま現在に至っていると考えられる。その結果、年齢相応の明瞭な発音でないために、本人は話すことに抵抗を持っている。

○WISCIVの検査結果からは、聴覚的な情報の処理の難しさ、聴覚的な短期記憶の弱さが読み取れる。ADHDの特性も見られ、視覚的にも聴覚的にも不注意が強く現れる。

○特定の語音が誤認識されているため、書字においても「ぎょうざ」が「じょうざ」「にんぎょう」が「にんじょう」などの誤りが見られる。また、五十音の配列が曖昧で、五十音のキーボードで語音を見つけるのに時間がかかる。漢字は小学校3年生程度の漢字が読めるが、想起することが難しいため、書ける漢字は小学校1年生程度の漢字に限られている。日記の文章は2～3文を決まったパターンで書き、使える言葉は限られている。「昨日、テレビをみました。たのしかったです。あしたもがんばりたいです。」と、毎日繰り返して書いていた。



・活動の具体的内容

(1) 「話すこと」への苦手意識に対して

転入後、対象生徒の構音の課題に対してどのように取り組むべきか悩み、まず、彼が小学校時代に行っていた口や舌の体操、発音練習、音の弁別練習などを始めた。

対象生徒は、始め、「これ、なつかしいなあ」と前向きに取り組む様子が見られたが、同じことを繰り返す行うことに飽きてきて、「またやるん？もう飽きたし」と、その練習に対して後ろ向きな様子が見え始めた。構音の課題へのアプローチが、彼にとっては単調なトレーニングになってしまっていたこと、彼の気持ちに寄り添えてなかったことに気づき、彼が興味を持っている、iPhoneやiPadを使って、彼が主体的に取り組めるような活動を仕組んでいく中で、構音の課題に迫ってみてはどうかと考えた。具体的な取り組みは以下の3つである。

① アプリ「BitsBoard」を使って発声

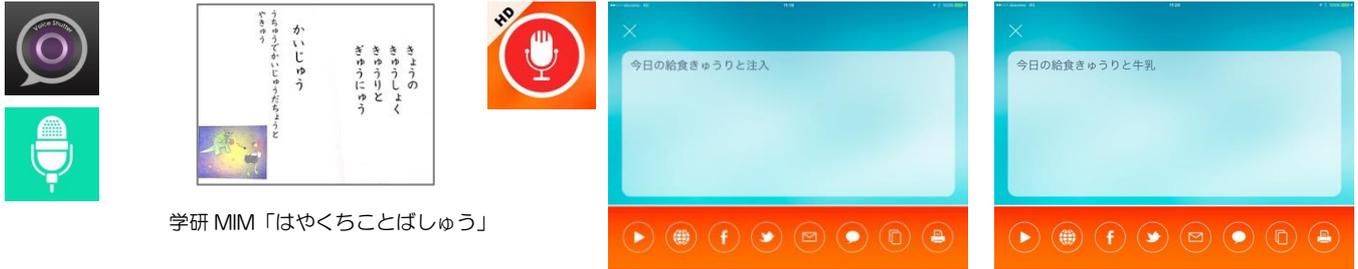
アプリ「BitsBoard」で文字の並べ替えのクイズを作って取り組ませ



る。対象生徒の好きな「モンスターハンター」のモンスターの名前を正しく並べかえるクイズを作った。モンスターの名前を知っているのは、対象生徒だけなので、他の生徒がクイズに取り組むときに声を出して教えられるように仕組んだ。

② 音声認識装置機能を使って発音練習

アプリ「音声認識装置」や、「声シャッター」「アクティブボイス」を使って発音練習を行った。自分が産出する音をiPadの音声認識機能を使って文字化し、視覚で確認させていった。



学研 MIM 「はやくちことばしゅう」

③ 読み上げ機能を使って音の聞き分けの練習

アプリ「指伝話50」を使い、音を聞き分けるトレーニングを行った。ゲーム感覚で、問題を作ったり、問題に答えたりさせながら、目と耳とで音を認識させていった。



(2) 「書くこと」の困難さに対して

① 自分に合うキーボード入力の仕方を見つける

五十音の配列の認識が曖昧で、五十音の中から語音を選ぶのに時間がかかり、集中が続かない。ローマ字入力も音声入力も難しい状況であったため、五十音の配列を再確認しつつ、ひらがな入力を練習していった。何行の音かが思い出せるようになると、ひらがな五十音のキーボードより、フリック入力の方がみやすく、自分でそれを選んで使い始めた。



さらに、フラワーフリック入力や手書き入力を紹介し、キーボード入力への抵抗を取り除いていった。

② 予測変換を上手に使えるように

間違えて入力しても、正しい表記が変換候補に出るように、ユーザー辞書に単語を登録しておき、自分で見て、正しい表記を選んでいけるようにした。

③ 「LINE」を使ってグルーブトークを始める

生徒3名と指導者3名でグルーブトークを始める。対象生徒の決まったパターンの文をほぐすことをねらいとして、話し言葉でやり取りをしながら、定型ではない文を自由に書き伝える楽しさを味わわせた。



④ 絵日記アプリを使ってのクラス日記づくり

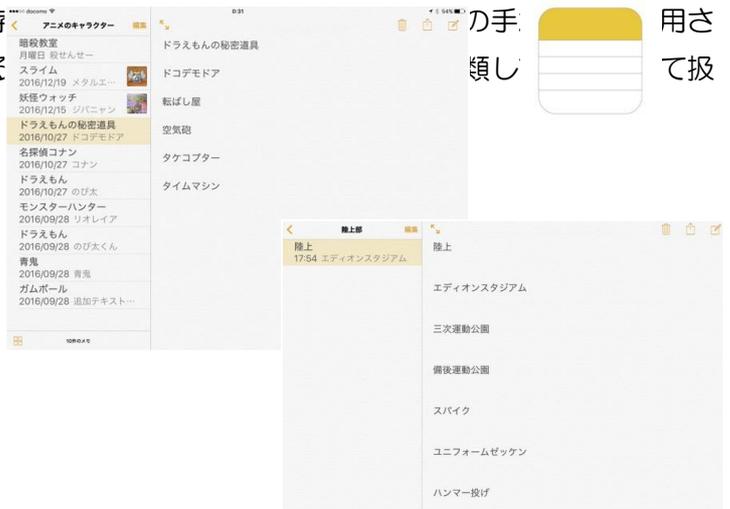
学級生徒の活動の場面を写真に撮っておき、次



の日に生徒が交代で文章を入力していく。みんなの活動をみんなで文章にしていきながら、対象生徒に他の生徒の表現を吸収させた。

⑤ 「マイ言葉辞典」の作成と活用

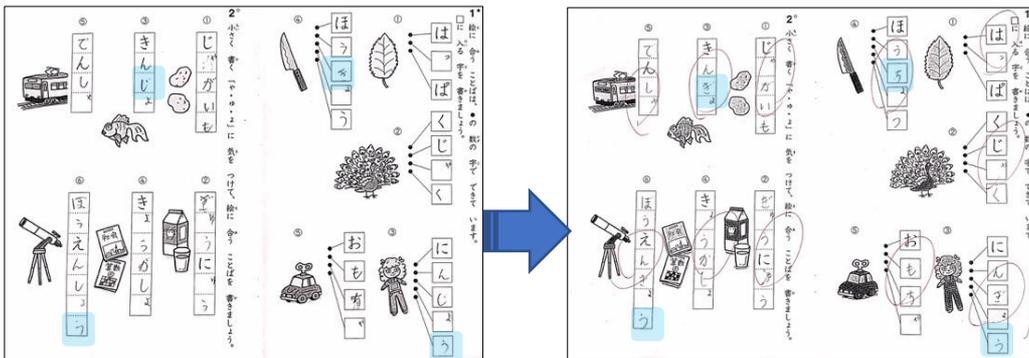
対象生徒が使いたい言葉を一箇所にまとめて保存させた。スポットライト検索ですぐに開いて見やすいため、保存場所は「メモ」を選んだ。カテゴリーごとに言葉集めを楽しんだ後、集めた言葉を「メモ」にフォルダごとに入力させた。言葉を想起できない時やつづりが合っているか自信がない時に、「メモ」を開いて見るように、声をかけていった。



・対象児の事後の変化

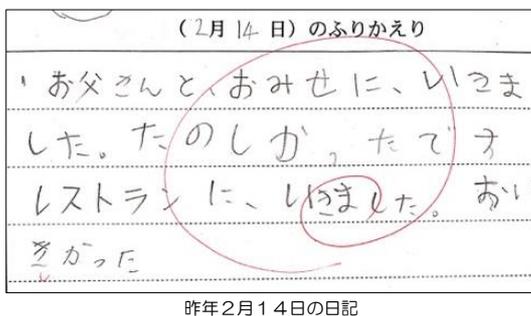
(1) 書字の誤りが減る

昨年1月に実施したテストでは、誤表記が見られた箇所が9月に実施したテストでは正しく書けている。「ぎゅうにゅう」の「ぎ」は「じ」と一度書いて誤りに気づき、書き直すことができた。同様に「ほうちよう」の「ち」も「き」と書いていたのを消して直すことができた。自分の産出する音が間違っていることを自覚し、正しい語音を視覚から認識し記憶することで、書字の誤りが減ってきたと考えられる。

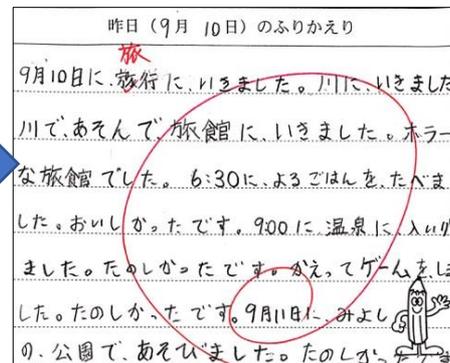


(2) 書くことへの抵抗が減る

メールのやりとりを楽しむことで、書くことへの苦手意識が少しずつ軽減されてきた。今まで硬かった表現も自由に書いてもいいことがわかり、書くことを楽しめるようになった。日記の文章も膨らみ、字形も整ってきた。



昨年2月14日の日記



9月10日の日記



言葉を想起して書く時に、手がかりとなるものがあれば行事の振り返りの作文にも意欲をもって取り組めるようになった。

7月に参加した野外活動の後で書いた作文ではまだ誤字が多く見られるが、しおりや写真を見ながら、作文に意欲を持って取り組むことができた。

(3) 会話が增える

9月、家族と出かけた時に、自分から iPhone を携帯して、写真を撮ってきて、学級の仲間に見せながら、家庭での出来事を発表した。写真を撮ってきてそれを手がかりに話せばいいことに自分で気づき、iPhone が活躍し始めた。

また、動画や画像を加工する楽しみを覚え、加工した自分の作品を見せては、「これ、見てください」と自分から話しかけるようになった。



(4) 人前でも話せるようになる

ボイスチェンジャーのアプリで自分の声を録音して声色を変えて楽しんだり、言葉を逆唱して録音し逆再生して楽しむなど、人前で自分の喋りを聞かれることに抵抗がなくなった。校外学習で NHK を訪れた時はお天気キャスターになってアナウンスを体験した。

12月の小中合同クリスマス会では、中学校の紹介動画を作り、小学生に見せた。当日は小学生の反応を楽しみにしながら、力作を披露し、自らマイクを持って動画の説明を加えた。緊張しながらも50人の前で堂々と自分の声を届けることができた。



【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

(1) 苦手な音を意識して聴きとるようになった

き	き	ぎ	ぎ	き	き	か	う
よ	や	や	や	や	き	い	ち
う	う	う	う	う	や	じ	や

冬休み明けにおこなった聴写の課題では、「ぎゅうにゅう」の「ぎ」を「じ」と書いて誤りに気づき、もう一度聞き返して書き直す様子が見られた。

自分の産出音がどのように聞こえているかを意識したり、誤認識していた音を、視覚から認識し直したりすることで書字の誤りが減ってきたと思われる。

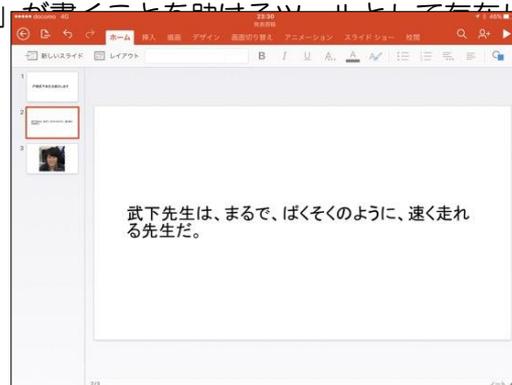
(2) 自分で「マイ言葉辞典」を使い始めた

国語の時間、比喩の学習をしていた時、陸上部の先生を何かに例えようと悩み、自分から「マイ言葉辞典」に入っている言葉を探して、文を考えた。入力していた妖怪ウォッチのキャラクターから、「ばくそく」という妖怪を選び、文を書いた。対象生徒の中に「マイ言葉辞典」が書きこきをするのを、見せて存在し

始めたと感じた。
また、書きたい言葉を忘れても大丈夫なよう

に、「ここに入れておこう」と、入力し始めた。

12月に参加した修学旅行の後にも、「メモ」の中の言葉を探して書くことができた。



(3) iPhoneで撮った写真や動画、加工した画像や動画が、話し伝えることの楽しさを膨らませた

何に対しても「めんどい」「むずい」と言って、取りかかれなかったり、すぐに飽きてしまう対象生徒だったが、9月以降、「話題の種」を見つけてから、iPhoneが彼の必須アイテムになった。「これを見せたい」「これを伝えたい」気持ちが膨らんで、「見て、見て」と自分から話題を提供し、会話を楽しむことができた。

転入前、お別れのスピーチをするのが嫌で、母親に対して「なんで転校させるんや」と、キレたことがあった対象生徒であるが、自分が編集した動画を見せたくて、大勢の前でも抵抗なく、動画の紹介スピーチをすることができた。スピーチできたことが「話しても大丈夫」という安心感になり、自信につながったようだった。

・今後の課題

(1) 来年度に向けて

特別支援学級の中では、母親も驚くほどおしゃべりになった対象生徒であるが、交流学級では本来の自分を出すことができず、依然、寡黙な状態が続いている。12月に参加した修学旅行でも、寡黙なまま三日間を過ごした。交流学級と支援学級で、しっかりと事前学習をして臨んだ修学旅行だったが、慣れない人の中では「寡黙な自分」になってしまい、話しかけられても頷くだけだった。

iPhoneの中に、班の仲間の名前や京都にまつわる言葉をたくさん入力して臨んだが、三日間iPhoneは担任に預けたままだった。彼の中には、「話しても、うまく聴き取ってもらえなかったらどうしよう」という不安や、みんなと違うことをすることへの抵抗から、交流学級の仲間の中での活用には至らなかった。対象生徒へのこれからアプローチは

話しても大丈夫という**安心感**をどうやって持たせるか

話したいという**意欲**をどうやって持たせるか

話してみようかという気持ちにつながる**自信**をどうやって持たせるか

その

ためには

こればあれば大丈夫だったという成功体験を次のステージにつなげる

「これがあれば大丈夫だった」「これを使ってなんとかあった」という成功体験をたくさん重ねていき、「これを持って外に出て行こう」という気持ちにつなげていきたい。

例えば、陸上部という小集団で対象生徒の「素」を出せるような取り組み、「実はこんなことができる」とか、「こんなユニークなところがある」という彼を、クラブの仲間に理解してもらうために、iPhone や iPad が活用できないものかと考える。

学校には学校のルールがあり、皆と違うことへの理解を得るのがまだまだ難しい状況がある。中学校では携帯電話の校内への持ち込みは禁止されているため、周りの生徒に対象生徒の iPhone の使用を理解させることは難しいことかもしれない。

しかし、彼がもっとツールの必要性を強く感じるようになり、それを使って教室の外に出て行こうとするようになれば、その気持ちを理解してもらうことは可能なことのように思える。「自分にはこのツールが必要なんだ」と主張しながら、学校という社会の障壁を破っていこうとする彼に育ってくれたらと考える。

(2) 進路に向けて

誤字が減り、学習に意欲を持てるようになった対象生徒は、高等学校への進学を希望し始めた。「めんどい」「むずい」と言って、取り組もうとしなかった課題にも手をつけ始めた。彼に合った構音へのアプローチをさらに研究し、「書く力」「話す力」を高めるための具体的な支援をさらに続けていきたいと考える。また、対象生徒の得意な部分をより高めていき、さらに自己効力感が高まるように取り組んでいきたい。2月に行われた広島市の中学校特別支援学級合同文化祭で、対象生徒は和太鼓演奏を発表した。優れたリズム感を活かして、見事にソロ演奏も披露した。彼が今進学を希望している高校には和太鼓部があり、「高校に行って太鼓を打ちたい」という具体的な希望も口にするようになった。

今後も、彼の気持ちに寄り添いながら、彼の「自信」を高め、希望の進路を切り拓いていけるよう取り組みを続けていきたいと考える。

